
セテカ!?

Keisue

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セテカ！？

【Nコード】

N8841W

【作者名】

Keisue

【あらすじ】

ある朝突然コナンが女の子になっちゃった！？普通じゃ考えられないが、幼児化という異例があるからこそ成り立ちそうなもの。灰原詩音という偽名と共にまたまた面白可笑しく(?) たまに事件のストーリー... になります様に。

初投稿です!!!... ので、恐らくというか間違いなく駄文になると思いますが、それでも読んで下さるとい方は、どうぞ、お読み下さい！

ある朝の出来事（前書き）

取り敢えず頭の切れる方ならタイトルの意味がストーリーを読まずに分かると思いますが。一応彼らはキャンプに来ているという設定です。

ある朝の出来事

．．ふあゝあ。

欠伸？誰の？この声は工藤君のじゃないし、無論私でもない。このテントには私と工藤君、それに吉田さんしかいない筈．．．。でも吉田さんはまだ寝てるから、欠伸の主はやはり工藤君？．．．．．つて工、工藤君！？

ふあゝあ。

俺は欠伸をした。なぜこんな事を考えているのか？それは作者に聞いてくれ。まあ、取り敢えず欠伸してから30秒位そのままの状態でしたら、灰原が目を見開いていた。

「．．．なに？」

．．ん？声の高さが異常に高いような．．．。

まあ、それはいいとして、灰原からの返事は、

「．．．．貴方、気付いてないの？」

「．．．何を？」

「．．．．髪の毛、声の高さ、その他諸々。」

髪を触って見る。なんか長い様な．．声の高さはさつきも感じた通り、高い気がする。いや、高い。間違いなく。

「取り敢えずこのテントから抜けて近くのトイレで自分の姿でもみてらっしゃい。吉田さんが起きたら面倒だわ。」

「うん、分かった。じゃあまた後でね、灰原。」

「早く行つてきなさい。」

「じゃ。」

俺はさっきの事から恐らく身体が女体化したと考えていたので、女子トイレに入った。予想通りではあったが、実際にみると少し実感

が湧かない。なぜか服も入れ替わってるし。この服は哀のよく着ているような服で、地味といえば地味。だけど自分にこの服が似合っているのが少し驚いた。顔立ちは哀にそっくり。髪は腰より5cmほど長い。．．が、別に重いわけではないのでよしとしよう。髪の色は．．黒髪と茶髪がまじっている。これは地の色であるうか。．．大体自分の姿を見終わって、まあこんなもんだらうと思い、哀の探偵バッチに連絡．．あれ？そういえば服が変わってるから探偵バッチを持ってない。代わりにケータイが入っていて、哀のケータイに電話して今戻るといって、明け方の空の下、テントに戻った。

「で、どうするの？これから。」

「どうするってたって．．どうするの？江戸川コナンはどっか行ってるって事にしても、私の事はどう説明していいのかが問題よね。」

「．．貴方、女言葉になってるわよ。」

「ん？男言葉の方がいい？だったら出来るだけそうするけど。」

「．．いえ、そのままでもいいわ。」

「哀ちゃん、コナンくん、起きて！」

「歩美がくる！！！」

歩美がテントに入ってきた。

「ご飯できたよ．．．って誰？」

「あ、えっと、あの、その、えっと、はっ、はっ、灰原詩音ですっ。」

「へ．．．で、コナン君は？」

「江戸川君なら偶々この辺に来ていた詩音と江戸川君の両親に会って一緒に行ったついでにここに詩音を置いてたって訳。」

「へ．．．ところで二人って顔が似てるね。もしかして姉妹？それとも双子？」

「．．．．双子。」

「ふーん．．．あ、自己紹介するね。取り敢えず二人とも出て！」
「ちょ、ちょっと．．．」

(これから大変なことになりそうね。)

という思考を二人が持っていたのをお互いに知らない・・・が、まあよしとしよう。

コナ・・・じゃなくて、詩音と哀は歩美に手を引かれ、外に連れ出された。

「僕は円谷光彦です。」

「俺は小嶋元太だ！宜しく！」

「そして、私が吉田歩美！宜しくね。」

「(知ってるんだけど)宜しく。」

「俺達で少年探偵団をやってたぜ！」

「それにしてもお二人は顔立ちが似てますね。」

「双子だから。」

「灰原つて双子だったのか。」

「・・・ええ。」

「哀君、と・・・詩音君、ちょっとこっちに来てくれんか？」

「「ええ、いいけど。」」

「ま、まさかきみは新一君かね？」

「ええ、そうよ。朝起きたらこうなってたの。」

「・・・三人だけなんだから、女言葉じゃ無くてもよかるうに。」

「いえ、演技とかそういう事をしないと自然になっちゃうから。」

「そうか・・・だったらいいが。原因は何なんじゃ？」

「分からないわ。これは流石に私でもお手上げ。」

「・・・博士、私は別に一生このままでも構わないけど。」

.....

しばしの沈黙。

口を開いたのは哀。

「だったらいいけど。少なくとも蘭さんには貴方がコナンだって事

は伝えておきなさいよ。工藤新一の声で一生帰れないともね。AP
TX4869の解毒剤を今飲んだって高校生の女性にしかならない
と思うから。」

「ええ、分かっているわよ。そんな事。」

「それじゃあ、そろそろ戻りましょう。皆お腹すかして待っていると
思うから。」

「ええ。」

「き、君達、ワシの事は覚えてるおるか？おゝい・・・」

ある朝の出来事（後書き）

えー、終わりました、第一話。

タイトルの意味、分かってない人の為、

せいテンカン

っていうか、分かってない人多いですよね。

まあ、衝動的に書き始めたんで、更新は兎のペース（最初に早く、途中でぶつとりという感じ）で行きますので。そうなたら最低1週間空きます。

本っ当にすみませんっ！え？何がって？気付いてない人はスルーしてください。これからは台詞の前に名前の頭文字（詩音なら詩、歩美なら歩、哀ならそのまま哀など）を入れます。．．．恐らく詩音が医学書とかに興味を持ちます。コナン君には、何が起きても推理小説好きのままがいい、という方にはすみませんが行は少なくなるつもりですので、見捨てたりしないで下さい。それにまだ恐らくですから。場面は想像にお任せします。表情も。

本拠地の報告（前書き）

えー、こんにちは。．．．まあ、Keisueです。前回30分程前に投稿した第一話に、はやくも脱字発覚。すぐに直しましたが、これからはきをつけねば。とは言っても二話目にこねってあり．．．ですよね？まあ始まります。どうぞ！

本拠地の報告

詩「・・・と、いう事よ、蘭姉さん。」

蘭「ちよ、ちよっと待って。貴方はコナン君で、原因不明の性転換した訳よね。」

詩「ええ、そうだけど。」

蘭「そして、新一が一生戻って来られないと思うって電話でいったのね。」

詩「ええ。相打ち覚悟で組織を潰すそうよ。」

蘭「だったら相談してくれば良かったのに。」

詩「相談したくてもできなかったそうよ。何しろその組織は組織を知っている者とその関係者全員を殺してしまうらしいから。勿論組織のメンバーは裏切らない限り殺されないらしいけどね。私も少し組織の被害に遭ってそれも組織を潰す一つの理由らしいよ。」

蘭「そう・・・。ありがとう、コナン君。いいえ、詩音ちゃん。」

詩（これでは実際に組織を潰すだけだけど・・・）
ピリリリリ・・・

詩（電話か・・・ジヨデイ先生？）

蘭「これ使えば？FBIの人からでしょ？」

詩「ありがと・・・ってなにこれ？」

蘭「変声機だそうよ。コナン君の声で電話とかでなければならぬ時に使ってほしいって博士が。」

詩「そう・・・じゃ、遠慮無く使わせてもらおうかしら・・・もしもし。」

ジ『Guess who?（だーれだ？）』

詩（コナンの声）「ジヨデイ先生、どうしたの？」

ジ『（・・・即ばれた・・・）ついに見つけたのよ！組織の本拠地を！』

詩（コナンの声）「本当に!?!」

ジ「ええ！明後日の午後十時に組織の本拠地に乗り込むけど、コナン君も来るの？」

詩（コナンの声）「うーん．．．行かないでおく。でも、潰したら最低でも連絡位はしてね。絶対。」

ジ「分かったわ。約束．．．ね。」

詩（コナンの声）「絶対．．．絶対死んじやだめだよ！ジヨディ先生！それに、今迄沖矢昴に変装していた赤井さんも一緒に聞いているんでしょ？」

赤「流石だな。そこまで見抜いて居たとは。」

詩（コナンの声）「二人が死んじやうなんて事は無いよね？」

赤「恐らく．．．な。何しろ危険な戦いだ。」

詩（コナンの声）「．．．全てが終わっても、まだ終わってなくてもまた何処かで会おう。生きてるっていつまでも信じてるから。じやあ、また。」

ジ「ええ。また．．．ね。」

ピッ ツー ツー ツー パタン．．．

詩「念を押して置いたから大丈夫だと思うけど．．．。」

蘭「大丈夫だよ。きっと。だから信じよ？ね？」

詩「．．．ありがと。」

蘭「何か言った？」

詩「いいえ。なんでももないわ。」

蘭「でも、ジヨディ先生って確か旅行でこっちに来てるって最初言ってたけど．．．。」

詩「．．．そこだけは突っ込まないで．．．。」

蘭「わかりました。そういえばこれからどこに住むの？」

詩「そっちがお望みとあらば阿笠博士のトコに移るけど．．．。」

蘭「じゃあこっちの望みは．．．此処に、居てくれる？」

詩「．．．いいわよ。私は。でも、迷探偵（メイトンテイ）と言っているから蘭は気付かなかった。」
（さんの方に聞かなければならぬんじゃないの？）

蘭「いいわよ。問答無用で承諾させるから。」

詩（こ、怖いわね。都大会優勝してるだけあって。）

力み過ぎて鉄球が潰れそうなくらい力が入っていた蘭であった。

新居・・・新部屋？（前書き）

こんにちは。keisueです。えー、色々と疑問点が出てくると思いますが、取り敢えずこれは夏休みの出来事ということにして置いてください。では、『セテカ!?!』第3話を、どうぞ。

新居・・・新部屋？

詩「あ・・・あの・・・さ。」

蘭「ん？何？」

詩「あ、いや、何でもない。」

蘭「？そう。」

詩（やっぱりいえないわね。こんな事。どうせ居候の身。寢床借りてるといふ事だけでも迷惑かけてるのに。）

蘭「????!!あ、もしかして自分の部屋が欲しいの？」

詩「・・・何で分かったの。」

蘭「だって貴方女の子になってるじゃない？だからお父さんの部屋で寝るのはやめておきたいけど、私の部屋だと迷惑が掛かるって思ってるんですよ。」

詩「凶星。」

蘭「これでも探偵の娘を17年やってるんだからね。あ、それで、空いてる部屋は無いけど、事務所を少しリフォームすれば一部屋くらいできるわよ。お父さんが名探偵になってからお金も結構たまってるから。」

詩「えつと、じゃあそうして貰おうかしら。」

蘭「じゃ、今業者さんに頼むから。」

詩「え・・・い、いくらなんでも決断が早すぎるんじゃない。。。」

蘭「いいの、いいの。お父さん間違いなく競馬とかパチンコとかですっちゃうから。こういう事に使ったほうが絶対いいって。」

詩「そ、そう。。。（これもこれで結構すると思うんだけど。。。）」

と、金使いの結構荒い蘭であった。

新居・・・新部屋？（後書き）

み、短い・・・前回などとは違って短い・・・しかもまたもや会話ばかり。それに加えて蘭と詩音しか出ていない・・・これは、ヤバイ。こ、このまま続けられるのか、僕は。ま、まあ次回もお楽しみ・・・？

夏休み明けの前日

詩「で、博士。何時の間に転入手続きを済ませたのかしら？」

博「一昨日じゃよ。一昨日。」

詩「それなら何故転入する張本人を立ち会わせなかったのか、教えてくれない？」

博「あ、いや、それは．．．。」

哀「その辺（なにをその辺に？）にしておきなさいよ、詩音。」

詩「分かったわよ。哀（呼び方変わってる）のいう事だし。それじゃ、ランドセルは今までのを使うから。」

哀「色が合わないけど（性別に）いいの？」

詩「いいんじゃない？指定されてる訳じゃないし。今まで使ってたやつの方が馴染みやすいでしょ。」

哀（なんか以前に増して世話焼きになった蘭さんが用意していそうだけど．．．）

ガチャ．．．

詩「ただいま．．．。」

蘭「お帰り！コ．．．じゃなかった。詩音ちゃん。はいこれ。新しいランドセル。」

詩「え．．．いらないんだけど．．．。」

蘭「なんで？姿が変わったんだから気分を改めて学校に行けばいいじゃない。」

詩「でも．．．。」

蘭「でも、何？」

詩（．．．なんか返す言葉が見つからない．．．）

結局新品のランドセルを背負っていくことになった詩音だった。

夏休み明けの前日（後書き）

．．．ごめんなさい。．．．すいません。．．．あー、もう！何で此処まで更新にブレイキがかかってしまったのは、くっだらな理由なので書きません（書くつもり全くない）。しかもやつと更新できたと思ったら．．．短い。でも、よく話すね。この三人（蘭、詩音、哀）。次回もまた遅れに遅れて1週間後かもしれない。できただけ更新したいんですが、色々都合がつかなくて．．．ま、まあ頑張りますので。

P・S．お気に入り登録5件ありがとうございます！

初日の朝（前書き）

遅れてすいません！いや、しつかしなんで此処まで更新が遅れる
んでしょうかね。まあ、勘弁してください。けーかく何にも立て
てないもので……。でも何で一回一回進行速度が遅いんでしょ
うね。ま、のんびり行きますんで、本編を、どうぞ！

7:15

蘭「詩音！詩音！詩音ってば！」

詩「うん．．．（パチ．．．トロン．．．）．．．明美さん．．．？」

蘭「何寝ぼけてるの、詩音！もう7:15．．．20分だよ！学校、遅れるよ！」

詩「がっこう．．．学校．．．！あ、あ~~~~~！！！！！！！」

無念の目覚まし君をさしおいて、一気に目が覚めた詩音。

詩「えーっと、えーっと、筆箱にノートに、教科書に、腕時計．．．」

学校は8:30から。現在、7:45。学校まで、走って20分。

詩「いただきます！」

5分後．．．

詩「ごちそうさま！」

蘭「早ッ！」

現在7:52

詩「えっと、筆箱、ノート、教科書、ケータイ、腕時計、眼鏡．．．よし。」

8:01 11、12、13．．．

詩「いってきます！」

蘭「ちよっと待って、私も行くから。」

8:03

詩・蘭「いってきます！」

小（小五郎）「おー、行ってこい。（朝のあれ）（目覚まし）が騒々しくはやく起きちまったぜ。あれで起きねえってんだから、相当な強者（？）だな。ありゃ。」

．．．．作者がいうことじゃないが、同感だ。

初日の朝（後書き）

今回はニュールームというか、ニュールームで起きる詩音がやっと。どんだけ苦労してんだよ！俺！五話目でやっと二学期の初日の朝って遅過ぎ！前回よりいくらか長いと思いたい。では、また次回にてお会いいたしましょう・・・ってカツコつけてんじゃねえ！自分！

（殴

ま、まあそういうことで、また次回をお待ち下さい。

初日の通学路

蘭「園子〜！ごめん、待った？」

園「あら、蘭、遅かったじゃない。いつもこんなに遅れないのに。」

蘭「この子が初日から寝坊しかけちゃって。」

園「あれ、そいえば誰？この子。」

蘭「ああ、この子は……。」

詩「灰原詩音。鈴木園子さんね。宜しく。」

あくまでも初対面の様に振る舞う詩音。

園「ね、ねえ、蘭？もしかしてこの子って……。」

蘭「そ。哀ちゃんの双子の……あれ？どっちだっけ。」

詩「妹。」

園「あ、そ、そう。」

園子さん、顔、引きつってますよ。

詩「あ、哀〜！」

哀「あら、詩音。遅かったじゃない。」

何か似たようなリアクションした人がいた様な……

詩「ごめんごめん。何かこっちの姿になって、体質が変わったらしくてさ。（小声。）寝坊したんだよね。」

哀「ふ〜ん……（工藤君記録に記録して置かなきゃね。）」

あ、あの〜、女史？何ですか？工藤君記録って。

詩「あ、もう始業のチャイムまで10分切ってるわよ。」

ちなみに探偵事務所から学校までは走って20分である。（歩くと30分）

詩（目線で）（走るわよ。）

哀（目線で）（ハイハイ。）

詩「じゃあ、また帰る時にね！蘭！」

蘭「うん、じゃあ、帰る時に〜！」

ギョーン！

初日の通学路（後書き）

こんにちは、keisueです。またもや短い（のか？）（文。ま、いつか。別に。（よくね〜！）哀さん？工藤君記録ってやっぱりなんですか？彼、又は彼女の行動を全て記録しているんですか？

哀「あら、知りたいの？」

．．．げ。哀さん。どうやって此処に？確かそっちの世界にはここに入る術がない筈なのに。

哀「そんなの作つたに決まってるでしょ。」

え。ど、どうやって作つたんだ？

哀「あなたの世界に行つてドアノブ持つてつてそれを精巧にコピーしただけよ。」

．．．あの滅茶苦茶複雑な回路のあれを。．．．すげえ。

哀「あんなの簡単でしょ？」

いや、あれ同じ色のコードがフクザツに絡み合ってるから簡単な訳ないんだけど。

哀「ま、じゃあね。作者さん。もっと長くてわかりやすい文を期待しているわ。」

．．．頑張ります。．．．。

哀「よし。」

ガチャ。ギイイイ．．．ボタン

はい、女史のおかげで後書きが長くなりました。

また次回も宜しくお願いし．．．

ガチャ

哀「します。」

ボタン！

．．．宜しくお願ひします。．．．。 （うっうっ。．．．）

まだ続く初日の出来事

ガラッ

詩「失礼します。小林澄子先生はどちらにいらっしやいますか？」

「ああ、小林先生ならあそこにいるよ。」

詩「．．．あちらの眼鏡の先生でよろしいんですよね？」

「うん。」

詩「ありがとうございます。」

「．．．礼儀正しい子だなあ。」

詩「すみません、今日からこちらに通うことになった灰原詩音と申します。」

小林先生（これからは「小」とする）「あ、あなたが詩音ちゃんね。哀ちゃんから聞いているわ。もう少し経ったら教室行くから、待っててね。」

詩「はい。」

小（この子、哀ちゃんとは別の意味で大人っぽいわね。ちょっとやり難い．．．って、生徒にそんな事関係ないわ！しっかりしなさい！自分！）

詩「?????????あの、始業のベル、そろそろ鳴るんじゃないんですか？」

小「あら、ホント。じゃあ行きましょうか。」

詩「．．．はい。」

ガラッ

小「はい、皆席に着いて〜！」

ガタガタガタ．．．

小「え、まず、残念な事に、江戸川コナン君が転校してしまいました。」

歩「え？コナン君転校しちゃったの？」

小「ええ。そして、いいお知らせもあります。入って来て！」
ガラッ

クラス全員「「え？灰原さん？」」

詩・哀「「なに（なんですか）。」」

小「えー、紹介するわね。灰原詩音さん。灰原哀ちゃんの双子の妹
だそうよ。」

クラス全員（だからあんなに似てるのか（似てるんだ）。）
詩「宜しくです！」

哀（クラスの大半が見惚れてるわ。しかも女子まで。あの顔には一
瞬私でもクラッと来たわ。．．．強者．．．なのかしら？）

詩音はと言えば．．．

詩「（小声）小林先生、どこに座ればいいんでしょうか。」

小「（つられて小声）哀ちゃんの隣の席でいい？」

詩「（小声）はい。」

スタスタスタスタ．．．ガタタツ．．．ストツ．．．

詩「（小声）宜しく。これからも。」

哀「（小声）ハイハイ。」

小「はい、じゃあ国語の教科書の14ページを開いてください！」

．．．（ハッ）ガタガタ、ガチャガチャ、バタバタ、ドツカン。

今の擬音は何だった．．．以前に皆さん慌てすぎですよ。その中慌
てていないのは灰原姉妹だけってどういう事ツすか？by：作者

生徒1「何ページ？」

生徒2「上巻？下巻？」

小「下巻の14ページですよー。開きましたか？」

生徒3、4、5「まだー！」

小「では早くしまししょうね。」

7・58秒後

小「準備できましたか？」

クラス全員「「はい！」」

小「では一時限目に入ります！」

ちなみにこの日の時間割は・・・

一時限目：国語

二時限目：数学・・・改めまして算数

三時限目：体育

四時限目：体育（継続）

給食

五時限目：美術・・・改めまして図画工作

帰宅

まだ続く初日の出来事（後書き）

はい、こんにちは、keisue . . .

哀「と、灰原哀です。」

. . . げ。女史。何時の間に。

哀「初回以来ね、貴方が連続で投稿したの。」

. . . すいません。

哀「そういえば前回の後書きで言ったわよね、もう少し長くしろって。」

. . . ごめんなさい。

哀「あと、なんで此処まで進行速度が遅いのかしら？」

. . . バタツ . . .

哀「あら、気絶しちゃった。まあ、いいわ。皆さん、また次回もコイツの文をお願いいたします。」

keisueの兄「まったく。世話焼かせやがって。誰があんたを現世に連れてくと思ってるんだ。」

ズルズルズルズルズル . . . ポイツ！

keisueの兄「次回もこの馬鹿の超駄文をお願いいたします。」

二時限目：算数

キーンコーンカーンコーン．．．

小「はい、じゃあ二時間目を始めますよー、席に着いてくださいね。」

ガタガタ．．．

小「今日は、二桁の足し算と引き算の筆算をやります。皆さん、教科書とノートを開いてください。ページは．．．上巻の64ページです。」

詩「．．．まだ二桁の筆算やってんの？うつつ．．．退屈だ。」

哀「そんな事言ってるこれから保ちきれなくなるわよ。」

詩「そんな事言ったらって退屈なものは退屈なんだもん。」

哀「まったく。どうなっても知らないわよ？」

詩「少しはいたわれ。いくらフェイクでも一応妹何だから。」

哀「い・や・よ。」

詩「チエツ。」

小「じゃあ．．．この問題を．．．哀ちゃん、お願いできるかな？」

哀「 53

+12

65です。」

小「はい、よくできました。それじゃあ二番を詩音さん。」

詩「はい。73

-21

52です。」

小「はいっ。よくできました。じゃあ、三番を」

詩「うづうづうづ．．．．．。眠い．．．．．。まだ45分もある．

「．．．ねえ、寝ていい？」

哀「ダメ．．．と言いたいところだけど正直言っても限界に近いのよね．．．。」

詩「じゃあ私は寝るね。」

哀「それじゃ、私も。」

詩・哀「おやすみ。」

キーンコーンカーンコーン．．．

詩・哀 パチ。（目が開いた音）

日直「起立！礼！解散！」

詩「うん．．．はあー。（伸びした。）終わったー。」

哀「．．．結局最後まで寝てしまったわね。ま、いいけど。」

．．．いいんですか。by：作者

光「お二人とも、授業中に寝てませんでしたか？」

詩・哀「．．．寝てた（ました）けど？」

それが？的な感じで言わないでくださいよ。by：作者

詩・哀「それがどうかしたの？」

光「あ、いえ、授業中に寝るのは小林先生に悪いのでは．．．と思つたのですが．．．。（この二人には理屈が通用しない気がします
が．．．）」

詩・哀「何で？数が．．．算数って退屈じゃない。」

光（やつぱり．．．）」

詩・哀「それがどうかしたの？」

光（またその“それがどうかしたの？”発言．．．）「あ、いえ、何でもありません。」

その頃1-B組先生の机では．．．

小（わ、私の授業ってそんなに退屈なのかしら．．．ちょっと凹むわ．．．。）

先生に筒抜け．．．いいのか？

一時限目：算数（後書き）

こんにちは。kei issueの兄のABC（仮名）です。弟が未だに気絶中なので・・・

（遠くから）もう起きとるわ！このクソ馬鹿兄貴！

あ、少々失礼。

ズカズカズカ・・・

ABC：（遠くから）オラ、誰の事じゃ！クソ兄貴ちゆうのは！

kei issue：（遠くから）おんどれの事じゃ、ボケ！

哀「・・・長くなりそうなので勝手に終わらせておくわ。ちなみにあの人達の兄弟喧嘩はまだまだ続きそうよ。まあ、次回までには終わってるだろうから後書きのストーリー（？）も宜しく願いますわ。あ、本編の方もまた宜しく願いますわよ。」

3 / 4時限目 体育(前書き)

オリキャラの名前募集中・・・感想からでいいので、募集中。

3 / 4 時 限 目 体 育

小「皆さん、集まりましたか？」

クラス全員（いつも通り詩音と哀以外）「はい！」「」

小「では皆揃ったところで校庭10周走ってみましょう！」

元「マジかよ．．．。」

小「こらっ！そういう事言わないの！もうすぐマラソン大会があるんだから、しょうがないでしょ？」

クラス全員（詩音と哀以外）「はい．．．。」

と、いう訳で．．．

5周目に差し掛かった時．．．

元「あゝ、もう腹減った！」

光「よ．．．よくこんな．．．時に．．．そんな．．．事い．．．
いえます．．．ね．．．。」

歩「大丈夫？光彦君。息切れ切れだよ？」

光「た．．．多分．．．大じよ．．．丈夫．．．です．．．。」

詩・哀「円谷君、一旦休みなさい。それが歩くか。」「」

歩「そうしなよ、ね？」

光「わ、わかりました．．．。」

8周目．．．

歩「もうだめ！動けない！」

この時点で走っているのは、何だかんだで体力のあった東尾マリアと灰原姉妹、そして先生だけであった。（因みに校庭は広い。1周でおよそ500m。つまり此処までで4kmな訳だ。）

小（な、何なの？大人ならともかく、この子達は小1、しかも女子なのに、4km続けて走れるなんて．．．）

小林先生、何だか卑怯。子供が走れなさそうな距離にしてる。まあ、

この3人がいるから意味無いけど。

そして最後の1周・・・

詩「確かこの1周で終わりですよね、東尾さん。」

マ「うん、そのはずやで？灰原さん。・・・なあ、し、詩音・・・
って呼んでもええ？」

詩「・・・フツ。いいわよ。じゃあ堅苦しいのは無しって事
でこつちも敬語外してマリアとでも呼ばせていただくわ。」

マ「ありがと！んじゃ、これからもよろしゅうな、詩音！」

詩「ええ・・・こちらこそ宜しく、・・・マリア。」

マ「じゃあ、あと200mぐらいしか無いし競争しようよ！」

詩「いいわよ。それじゃ、よい・・・。」

詩・マ「ドーン！」

・・・なに？あれ。あの滅茶苦茶な速度は。オリンピック選手を余
裕で凌駕してそうなああの二人、何者！？By：作者

詩「さ、さすがに今迄走ってただけあって疲れがどっと出てきたわ。」

「

マ「同感・・・や。」

そして遠くから眺めていた哀はというと・・・

哀（また詩音記録に記録して置かなきゃね。）

・・・工藤君記録から詩音記録に変わっていたが、あれは続いている
らしい・・・。

3 / 4 時 限 目 体 育 (後 書 き)

こんにちわ．．．k e i s s u e だす。突然ですが、k e i s s u e の兄、A B C (仮名) の名前を募集しています。あー、いて。やつと四の字固めから開放された．．．いててて．．．

哀「こつち来なさい、みてあげるから。」

あ、はい。お願いします、哀さん。

哀「あらあら、顔がアザだらけなのに加えて肩の骨が外れているわね。(k e i s s u e の状態の説明) ．．．ひどいやられ様ね。」

はい．．．

哀「まあ、あの腹がいつつも煮えくり返ってるようなあなたのお兄さんにも比はあるけど．．．」

あ、そうそう。これを読んでいる人へ 現在、オリキャラの名前募集中です。あと、A B C (仮名) の名前も。この二つは感想のトコに最初にオリキャラならO、A B C ならAと最初に打ってから名前をお願いします。では皆さん、また次回でお会いしましょう！

本の山の中殺人事件 「事件編」 (前書き)

タイトルの通りの事です。

P . S . T h a n k y o u 1 0 0 0 0 0 P V !

本の山の中殺人事件 「事件編」

小「では皆さん、寄り道せずに帰りましょう！」

クラス全員「「はい！」」

詩・哀「「……………」」

そして…………本屋にて…………

哀「…………おじさん、あの本、取ってくれる？」

店長「いつもの医学書？ハイハイ。」

詩「あ、私はそっちの医学書取って欲しいんですけど…………」

店長「これかな？勉強好きなお嬢ちゃん達。」

詩「ありがとうございます。」

店長「これ位どうって事無いって。」

…………怪しまないんですかね。小学生が医学書って、普通ありえない筈ですけど…………（つーか作者自身ほとんど触った事ない。）

店長（いやー、感心するね。他の子供は漫画をペチャクチャ喋りながら読んでるっていうのに。）

詩（ん？あれって…………あ、そうだ。ミステリ小説の最新作の…………って残り1冊！？わー、すごい！買おつと！…………でもこっちの医学書も捨てきれない…………でもどっちも買つとお金が足りないし…………。どーしよー！）

店長「ねえ、君達。」

詩・哀「「なに？（何でしょう）」」

店長「その医学書、あげるよ。」

詩「い、いいんですか？」

店長「ああ！いいともさ！」

詩「あ、ありがとうございます！」

店長「じゃあ、袋に入れるからレジの方に来てね。」

詩「わかりました。一冊だけ買いたい本がありますから取って来て

本の山の中殺人事件 「事件編」 (後書き)

やっと起こせた殺人事件．．．っていくら架空でも被害者に申し訳ないか。まあ、この殺人事件の犯人の見落としとかあんまり期待しないでください。なにしろ、この錆び付きまくって回らない脳みそに加えてこの文章。まあ、前後編、又は前中後編になるかは分かりませんが、読んでください！(マジで。) それではこの辺で失礼しまーす！

本の山の中殺人事件「捜査編」(前書き)

全話・・・までは行きませんが、前の奴を結構編集致しました。もし宜しければそれも読んでおいてください。

本の山の中殺人事件「捜査編」

目暮警部（今後「目」）「ふむ．．．被害者の名前は大場徹、38歳。OX会社の社員．．．か。」

高木刑事（今後「高」）「はい。そうです。死因は恐らく後頭部に重くて硬い物を振り降ろされた事による頭蓋骨陥没である物と思われず。」

目「撲殺．．．か。」

詩「失礼ですが、目暮十三様と高木涉様ですよね？」

目「あ、ああ、そうだが．．．君は？」

詩「申し遅れました。灰原詩音です。警部さん達の事は哀や江戸川コナン君からお話は伺っております。」

高「そついえば居ませんね、コナン君。こついうところには決まって彼が居るのに。」

哀「江戸川君なら渡米したわよ。8/27に。詩音と入れ替わりで。」

目「まさかとは思うが．．．コナン君の事件吸引体質を引き継いでいたりしないだろうな。君らの内のどちらかが。」

詩・哀「さあ．．．どうかしら（どうでしょう）？」

目・高（ま、まさか．．．な。）

高「今回の事件の容疑者はこの3人です。」

目「名前は？」

高「えー、まず、高峰弘樹さん。27歳で独身。次に、竹林友美さん。17歳で現在此処でバイトをしています。そして、此処の店長の福澤聡さんです。他にも数人客は居ましたが、全員それぞれを視認していてアリバイは成立しています。」

詩「店長さんのアリバイも成立していますよ。」

目・高「え？」

詩「だって店長さんの事は私と哀がずっと視認・・・してましたから。」
高「ほ、本当かい？それは。」
哀「ええ。それは確かよ。」
目「なら、容疑者は2人に絞れる。高峰弘樹さんと竹林友美さんに事情聴取をしてくれ。」
高「はい。」

10分後

高「事情聴取、終わりました。」
目「おお、そうか。で、どうだった？」
高「えー、まずは高峰氏の証言によりますと、彼はずっと遺体あつたコーナーから本棚一つ越えた場所、つまり、この雑誌コーナーに居たそうです。」
目「フム・・・それで、竹林友美さんの方は？」
高「はい。竹林さんは、こちらも遺体の本棚一つ越えた場所で、高峰氏の居た場所とは逆側らしいですが。そこで、本を整理して居たそうです。」
目「その二人に動機はあるのかな？」
高「あ、はい。えーっと・・・」
詩「確か、高峰氏の動機は多額の借金返済を迫られていた事で、借金消滅が狙いだという可能性が極めて高い。竹林さんは彼女の父親が大場氏から金を借り、その後、自殺まで追い込まれた事から、敵討ちの可能性が十分ある、だよな。」
高「あ、うん。その通りだけど、どこでそんな情報を・・・」
詩「あ、いや、少し勝手に色々聞かせてもらっただけだから。」
哀（・・・？何が・・・変・・・ね。何かしら？）
目「まあ、いい。取り敢えずどちらにも動機はあるという事だな。」
高「あ、はい。その通りです。あ、後、鑑識からの連絡で、凶器は何か、鉄板の様な物の角で、死因はやはり強く殴られた際の頭蓋骨

陥没の様です。」

目「そう．．．か。で、その凶器自体は、やはりあそこに転がっていた．．．。」

高「はい。あの棚の板だと思われます。」

因みに、棚の板は鉄でできている。ついでに言えば、その板は上に動かせば簡単に外れる嵌め込み式だ。

目「分かった。ありがとう。」

詩（．．．これで事件の犯人及び動機や凶器が分かった。だが、まだ物的証拠が．．．）

そこで、詩音がきたのは、殺人現場．．．の、飛び散った血の跡が残っている場所。そこで詩音はある物を見つけた．．．．途切れた血の跡を。

詩（よし．．．これで全てが揃った。後は、これをあの人に突きつけるだけ。）

果たして事件の真相はいかに！解決編へ続く！

本の山の中殺人事件「捜査編」（後書き）

ついに12月にはいりました！と、言っても、独身、一人暮らし、恋人のいない俺には呪いたい月ですけどね。まあ、次でやつと事件編が終了する。取り敢えずクリスマス迄には解決編投稿しますんで、哀さん、兄さんの出なかった後書きはしゅりょー。また次回！
P S . 何でもいーから兄とオリキャラの名前募集中ダー！

本の山の中殺人事件「解決編」(前書き)

そーいや、タイトルのせいで誤解している方もいらっしゃる可能性大なので一応言っと来ますが、ガイシヤは本に埋れていた訳では無い！まア、これをベースに本編へGO！

本の山の中殺人事件「解決編」

まあ、そんな訳で．．．

詩「まず、凶器は何か。それは、警察の方々が思っている通り、この本棚の板。この角で、真後ろから．．．一撃。そこで、先ず犯人がこの凶器で殺害したのは極めて単純。警部さんは、お分かりよね？」

目「此処で何かが被害者と犯人の間にあつた訳か．．．」

詩「ええ。その犯人は此処に以前も来た事があつて、その時に本棚の板がただはめ込んであるだけ．．．嵌め込み式だということを知つたのよ。」

目「と、なると犯人は竹林さんという事になるな。彼女は結構前から此処のバイトをしていた筈だから。」

詩「いいえ。竹林さんは違うと私は踏んでいるわ。確かに本棚さえ乗り越えればこのコーナーに来れるかもしれないけれど、この漫画コーナーにはいつ子供が来てもおかしくないから。もし何かが起こつていても、殆ど気にせずによく友達が此処で読んでいたりしたらね。」

目「と、なると犯人は高峰氏という事になるが。」

詩「そう。犯人は高峰さん。多分動機は借金の額を何かの件で脅されて増やされたって所かしら。」

高峰「ちよつと待つてくれ。何かの件って何だよ。それ以前に俺が犯人だつてー証拠は？」

詩「そういえば、この不自然に途切れているこの血の跡は何か、わかる？」

高峰「知るかよ、んな物。」

詩「これ、実は犯人が踏んで行つたんだ。」

高峰「まさか．．．!」

詩「ああ．．．ついてる筈だぜ？あんたの靴の裏に。小さな小さな

赤黒い点がな。」

哀「え？こ、この口調．．．江戸川君？あの違和感は．．．敬語を外していたんだわ！」

まあ、そんな訳で、靴の裏に赤黒い点とやらがあっちゃったりして、動機、暴露。

高峰「俺、借金返す為に、会社の金横領しちまったんだよ。だが、その事があのクソ野郎に知られちまって．．．それで、今日偶々此処で会って、値上げ交渉されて．．．気付いたら、もう．．．」
目「．．．行こうか．．．」

詩「ふう．．．まさか初日に事件が起こるとは思わなかった．．．」

哀「それよりさっきの。男口調は完全に抜けたんじゃ無かったの？」

詩「？何の事？」

哀「とほけないですよ。さっきのは．．．」

詩「??？」

哀「まさか、本当に覚えて無いの？」

詩「あ、いや、覚えてる覚えて無いの前に、いつ、私が男口調使っ

たの？」

哀「推理中ずっと。」

詩「うつそ！本当に!？」

店長「いやー、嬢ちゃん、凄いな。犯人当てちゃうなんて。」

詩「それ程でも無いですよ。」

店長「いやいや。凄かった。あ、そうそう。君の本二冊と、お釣り。」

「

詩「あ、有難うございます。」

店長「そういえば、時間。いいの？」

その時間とは．．．8：24 21、22、23．．．

詩「え．．．エエ．．．!!!もうこんな時間!?じゃ、じ

ゃあまたいつか来ますね、店長さん!」

店長「気を付けて帰るんだよ!」

毛利探偵事務所にて・・・

蘭「し、詩音！どこ行ってたの！？まあ、遅くなった理由は多分事件でしょうけど。」

詩「ふらつと立ち寄った本屋で事件発生。何か知らんけど、解決して来ちゃった。」

蘭「ハハハ・・・（事件吸引体質はやっぱりコナン君だったのね。）

「ま、そんなこんなで、事件終了、一件落着。

次の日、朝刊の見出しに、「小学生探偵、事件解決！」と、書いてあったとか無かったとか。

本の山の中殺人事件「解決編」（後書き）

ほい、予定より早く更新した解決編！事件への苦情は受けつけなあいー！！！！オリキャラの名は受け付けるうー！！！！

詩「ま、確かに事件の苦情は受けないけどさ、その異様なテンションの高さ、一気に低くしてくれる？」

ピタ。ななななななで此処に詩音しゃんが！！！！

詩「ん？ああ、哀から代理を頼まれた。そのドアの先の人間をひっぱたいて来いつてさ、ひっぱたく気などありませんけど。」

あ．．．ありがと。哀しゃんがきたらひっぱたかれてた。じゃあ、もうこのまま後書きは終わってもいいよね？

詩「いいと思うけど。」

じゃあ、多分次回はクリスマスネタ。12/20から29までには出すので、お願いしまーす！！

どーせだから人物紹介（灰原姉妹？）（前書き）

何か時間ができたんで、こーゆーの必要かなーと思って書いてききました。読まなくてもいいですけど。

どーせだから人物紹介（灰原姉妹？）

灰原詩音／江戸川コナン／工藤新一

黒ずくめの男達、ジンとウオツカと、どっかの誰かの怪しげな取引現場を目撃し、殴られアポトキシンを飲まされて、奇跡的生還。薬の副作用で幼児化。それから約7、8ヶ月後、原因不明の性転換。性転換して、女言葉になったものの、事件や、推理などの時は、猫被りつつーかなんつーか、敬語が消え去り、無意識の内に男口調に。これもまた、原因不明。

フェイクだが、一応灰原哀と双子設定。親友は東尾マリア。姉（的存在）は毛利蘭。音痴癖は治ってないが、ピアノが急に上手くなった模様。取り敢えず絶対音感の持ち主。医学書、メモ帳、万年筆を常に手にしていたりしていなかったり。未だに推理小説が好きな模様。作者の声が聴こえる人物の1人。もう一人は女史。

灰原哀／宮野志保

元組織の仲間。アポトキシンの開発者。宮野明美が殺されて、何故かを知るため、研究中断という対抗手段をとつてる間にガス室監禁自殺目的で飲んだアポトキシスが彼女を灰原哀に変えた。詩音の正体が江戸川コナン及び工藤新一だという事を知る数少ない人物の1人。親友は吉田歩美（？）、姉は宮野明美。毛利蘭と宮野明美を重ねている可能性大。前は解毒剤開発に入れ込み、夜更かしだらけだったが、今の夜更かしの理由は、「医学書を読む事に没頭してしまつた。」である。作者の声が聴こえる人物の1人。もう一人は詩音。

どーせだから人物紹介（灰原姉妹？）（後書き）

今回は後書きストーリーはやりません。ご了承ください。ただ、結構先になるかと思いますが、この「セテカ!？」と、「ハヤテのごとく!」のコラボをやるかどうかと思うんですが、それって此処に掲載してもいいか、それとも別作品として投稿した方がいいか、どちらですか？皆さんのご意見を是非お聞かせください。感想から送って頂ければもう、十分です。

どーせだから人物紹介（蘭＋マリア）（前書き）

前回の二人を書いたんだから、この二人も・・・みたいなの？

どーせだから人物紹介（蘭＋マリア）

毛利蘭

毛利小五郎、妃英理の娘。超絶的な身体能力及び多種類の空手技を使いこなす技力を持っている。それを利用して、拳銃の弾をかわしたり、犯人を撃退したり、ロッカーへこませて脅したり、強行突破の為にドアを蹴り破ったりと、用途は色々。とある動画によれば、その様にして壊されたものの被害総額は1,509,538円になるそうです。足の速さは詩音、マリアの方が少し上。詩音が江戸川コナンだという事を知る人物の1人。それに加え、自分の事を「蘭」と呼ばれる事を許している所から、コナン「新一だと気付いている可能性あり。アニメ、原作などよりも世話を焼く事が好きらしい。鈴木園子と親友関係。恋人は未だに不明。結構キャラ崩壊してると思う人物のTOP3に入りそう。色々事件があり過ぎて、事件慣れした＋死体慣れしていたりする事から、稀に詩音の初動捜査を手伝っている。（主に手伝うのは、少年探偵団、女史、高木＋佐藤、その他諸々。）

東尾マリア

キャラ崩壊してると思う人物のTOP1！これ、間違い無い。だってさ、あの物凄く大人しそーなあれが5kmだぞ？あれが「詩音」だぞ？しかも次話で解るけど、物凄く気軽に呼んでるんだぞ？あり得ね。ま、壊れた方が自分なりにかけていいけどね。をい。ま、紹介しなきゃね。設定は勝手に決めちゃいます。原作及びアニメではもう登場しないであろう一回限りのキャラクターだから。えーっと、今迄遠山和葉の家の近所さんだったが、親の都合で急遽米花町へ引越し。現在、米花町3丁目のあるマンションの一室に住んでいるとかいないとか。大阪にいた間に遠山和葉から合気道を習っちゃったりして、体力がついたとか。何故か「骨の関節」に関し

て詳しい。詩音は大親友に後程なるはず。両親はどちらも仕事で最速7:30、最遅次の日の夜中に帰宅。何故か犯人確保に貢献し、犯人の足の関節を決めた事もあったり、無かったり。何にせよ、色々あるけど、れっきとした小学生なのである。

どーせだから人物紹介（蘭＋マリア）（後書き）

keissue・兄「はーっはっはっは！！！！！！！！！！やっと出られた、弟がぶち込んでくれちゃったあのオリの中から！！！！！！！！！！どれ、復讐してやるっ．．．って居ねえ！今日に限って居ねえのかよ！！！！」

バキィ！！

．．．どきどき。危なかった。ドア壊してっただけど、修理費って高いんだよな．．．。暫くは兄に会わないように注意しておきます。では、また次回にて！！

keissue・兄「てめー！！こんなトコにいやがったか！！」
ぎえええええ！！！！！！

クリスマスパーティー。(前書き)

予告より相当早めな投稿ですウ!!!ま、クリスマスネタです。どぞ。

クリスマスパーティー。

さて、今日はクリスマス。イヴではなく、クリスマスの12/25。何故だか全員出払って（出払った意味はタイトルの通り）、探偵事務所に詩音一人。前回買った医学書読んで、超絶的な暇を潰し中。

詩「作者君、うるさい。黙ってて。」

あ、了解です。と、言っても詩音さん？僕が話さなくて詩音さんも話さなかったら、完全に無音なんですけど。ま、いつか。じゃあ、効果音だけ、どうぞ。

.....パラッ.....
.....ペラッ.....

やっぱり退屈だから、作者が勝手に時間進めます。

つてな訳で、7:00PMの阿笠邸。

元「おい、光彦！そのガムテープ取ってくれ。」

光「はい。どうぞ。」

元「サンキュ。」

蘭「あ...よいしょっと。」

歩「わ〜！私もやって見よ。」

哀「やめときなさいって。絶対落ちるわよ？」

歩「大丈夫、大丈夫！」

この後は歩美がお肉を飛ばしてひっくり返そうとして落として女史がフライパンでキャッチした。

歩「ありがと...。」

哀「...そろそろ詩音の呼び頃じゃ無いかしら。」

蘭「あ、本当だ。マリアちゃん、探偵事務所の場所知ってる？」

マ「あ、うん。確か5丁目の...。」

蘭「じゃあ、呼んできてくれるかな。」

マ「分かった。じゃあ、鍵を．．．」
蘭「はい。後でちゃんと返してね。」
マ「分かってます。」

そーゆう訳で、ご到着。

マ「ほら、詩音。起きて？こないな所で寝ると風邪引くよ？」

詩「う．．．ん．．．。」

マ「しーおーん！」

詩「ん．．．マリア？何で此処に．．．」

マ「ま、ええやん。取り敢えず阿笠博士っていう人の家に行くで。」

詩「分かった。ちょっと待ってて、ジャケット取って来るから。」

その後、8：02 45、46、47．．．

蘭「じゃ、クリスマスパーティーを開きまあす！！」

パパンツパンツ

クラッカーうるせー。 その場にいない作者です

蘭「マリアちゃんはこのケーキがいい？」

マ「あ．．．じゃあ、シヨート？」

蘭「はいはい。シヨートケーキね。」

歩「哀ちゃん、さつきはありがとう。お肉。」

哀「あれぐらいなんでも無いけど、そのお肉、 たった今小嶋君の口

に一口で吸い込まれたわよ。」

歩「ウソ！！」

光「元太君、おつきなお肉を一口ってというのは．．．」

元「もご？．．．（ごくっ）何だ？」

光「．．．何でもありません。」

博「いやー、今年ももう後1週間も無いのう。」

詩「今年は色々あったわね。 幼児化して、事件体質になって、小

学校に通って、キャンプいって、性転換して、事件に遭って．．．」

博「い、色々あり過ぎじゃな。」

詩「もう少しハプニングが減って欲しいけどね。ま、しょうが無い
か。」

哀「もう、諦めれば？詩音の周りは99%事件発生区域なんだから。
」
詩「．．．認めたく無いけど、確かに。」

蘭「皆さん、此处でお待ちなねの．．．イベントタイム!!!この
時間は、それぞれが持っている隠し芸を披露する時間です。では、
私から．．．此処に3本のバットが支柱無しで置かれています。
これを、蹴りで折ります！」

バキバキバツキ

蘭「はいっ！」

パチパチパチパチ．．．

元「んじゃ、次俺！腹踊り！」

歩「私は．．．うーん．．．ごめん。ない。」

哀「ワイン一本一気飲み。」

詩「ちよつと、哀。」

博「ワシの名前。アガサハカセと書いてアガサヒロシじゃ。」

マ「えーつと、ウチは．．．」

詩「マリアは私とマジック。っていう事で．．．このまんまじゃあ
盛り上がらないから、取り敢えず服装をchange！」
マ「わっ！！び、吃驚した〜。」

詩「そして私も．．．はいっ！さて、此処になんの変哲もない訳で
は無いけど、取り敢えずシルクハットがあります。普通のシルクハ
ットですよ？では、いきます。One, Two, Three！」
バサバサ．．．

こうして夜は更けて行く．．．

クリスマスパーティー。(後書き)

今回の後書きストーリー。

眠い。眠い眠い眠い眠い眠い眠い眠い眠い眠い眠い眠い眠い。

コナンの絵を書いたり、コナン最初から読んだりする事は仕事が終わってからでないと、つまりは夜中にしかできない。

keisue・兄「シャキツとしゃがれオラア!!!!!!」

詩「ホットコーヒー、飲む？」

哀「目が覚める錠剤なら此処にあるけど、要る？」

あ、じゃあホットコーヒーとその錠剤を貰ってきます。

詩・哀「はい。」

ありがとうございます。……………ぶはっ。

詩「い、一気飲み……………」

さて、今回は恐らくnew year's ネットです。でわ、またその頃に、再見！

初詣のバ快斗アホ子（前書き）

ある人から質問がありました。稀に出てくる「女史」と言う人物。これは、灰原哀さんの事です。何となく使ってしまうんです。いちいち名前変えちゃってすいませんでした！！！（これからもこれを使う可能性100%なのでご承知願います。現に今回の後書きに使ってるし。）

初詣のバ快斗アホ子

大掃除終了後・・・

蘭「ねえ、詩音。明日初詣に行かない？」

詩「やだ。」

蘭「やだって・・・じゃあ何したいの。」

詩「炬燵でみかんとテレビ見るに決まってるじゃん。」

15分後、説得完了。

蘭「はい、これ。ま、着付けとかはやったげるから。」

詩「いや、行くんなら私服で行きたいんだけど。」

蘭「いいの、いいの。たまにはこーゆーもんも着ないと。」

詩「まったく・・・分かったわよ。その代わり化粧とかは無しだから。」

蘭「はいはい。分かりました。」

つてな訳で・・・元旦。

詩「ハア・・・。」

蘭「ため息つくと、幸せ逃げるぞ。」

詩「・・・ハア・・・。」

蘭（・・・どうしよう、このため息つきまくるのには5、6年早い
と思える人物・・・。）

？「何だってこの俺様がアホ子なんぞの初詣に付きあわなきゃなら
んのだ！」

？「いいじゃない、別に！暇だったんでしょ!？」

？「んな訳あるか！こんな寒い日は、炬燵にミカンでテレビ見る
つて決まってるんだよ。」

詩「・・・あそこの男の人の言ってる事がわかる気がする。」

蘭「・・・私的には女の人の言ってる事が・・・。」
じい~~~~~

快「その諸々の中身は？」

詩音が女になつた経緯説明中．．．完了！

詩「つて言う訳だけど、そっちこそなんで世紀の大怪盗さまがこんな所で、私服で、しかも初詣に来てるのよ。」

快斗、経緯説明中．．．完了！

快「つてな具合に無理矢理連れ出されたんだよ。」

詩・快「それにしても、早く帰って炬燵入りびたりたいな．．．」

「

その頃、もう2人は．．．

中森青子（今後「青」）「もう、あのバ快斗がね、初詣なんか行きたくないって言うんだよ！初詣は一年に一回しかできないのに．．．」

「

蘭「そうそう。こつちの方もさ、やだつて即答されて、15分も説得し続けて漸く承諾してくれたのよ？」

意気投合中．．．（笑）

蘭「あ、居たよ、あの2人。」

青「本当だ。おーい！」

ポンッ！

詩「それぐらいなら私だってできるわよ。」

ポンッ！

快「へへ。名探偵つてマジックできるんだ。」

詩「こつちの姿になってからできるようになったんだけど、下手かな。」

快「いや、上手だと思う。この快斗サマには敵わないけどな！」

青「．．．快斗が認めるなんて、相当な腕だね、あの子。」

蘭「へへ、そうなんだ。」

快「まあ、こうしてお互いの素性を知り合った以上いい相談相手になれると思うから、メアド交換しとこか？」

詩「それじゃ、ついでに電話番号も。」
交換中・・・交換完了！

青「・・・さっきのは素で聞こえなかったのか、無視したのか、
ちやんはどつちだと思っ？」

蘭「うーん。微妙な所ね。」

その後、それぞれの家に帰って行きましたとき。

一日遅れのおせち料理

今日は、1/2。1日は過ぎ去り2日。この日詩音は大量の食材の入ったエコバッグを持って工藤邸へと向かっていた。その理由は今朝の電話で

哀「おせち料理？食べた事無いけど・・・どうして？」

と、言う訳である。ま、つまりはおせち料理を食べた事が無い女史の為に作ってあげよ、と言う事だ。博士は作らないって言うてたらしい。因みになぜ工藤邸に向かっているかと言うと、そこには「美味しいおせちの作り方」と言う題名の本を見た覚えがあるからそれを利用しようと考えていたりしている。（作者はこの本が実際にあるかどうかは知りません。）

つて事で、現在色々作り中。料理の腕は蘭より1ランク下ぐらい。コナン時代よりは格段と上達している。ついでに、食材が大量なのは警視庁におすそ分けする為である。

詩「ってゆうか、説明長過ぎ。あと前にも言ったけど、もうちょっと静かにしてくれる？」

うーん・・・静かにしろと言われて仕舞ったら、やっぱ・・・
3時間後・・・

時間飛ばすしかないよなあ？ 誰に聞いている？

詩「よし、これで・・・終了！」
終わりましたか。

詩「うん。ちょっと貴方も運ぶの手伝ってくれる？」

でも、俺って一応天の声の役だけど・・・ま、適当に入っちゃえばいいか。

巢瓜圭太（すうりけいた、今後「圭」）「じゃ、行きますか。」

詩「んじゃ、これ持って。」

圭「重っ！・・・後でちょっとご馳走になってもいい？」

詩「・・・いいわよ。」

一日遅れのおせち料理（後書き）

おつす、巣瓜圭太．．．ではなく、keissueデス！いやー、年明けちゃいましたね。改めて明けましておめつとさん！因みに巣瓜圭太は偽名です。当然だけど。由来はkeissue。巣瓜がsue^スで、圭太がke^{ケイ}i。どーだ。単純だろう。

哀「自慢しても意味ないし、何もでないし、自慢する事じゃないし。

「まあいいじゃん。じゃあ、この辺で失礼しまーす！

哀「まだ一行しか喋ってないんだけど。」

今二行目喋ったじゃん。では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8841w/>

セテカ!?

2012年1月6日10時46分発行